

印欧祖語*s に由来する共通スラヴ語*z について¹

大山 祐亮

xzel83ph@gmail.com

キーワード：歴史言語学 印欧祖語 共通スラヴ語 音韻論 同化

要旨

共通スラヴ語*z は印欧祖語の有声口蓋破裂音*g^(h)あるいは有声破裂音の直前にある印欧祖語*s の反映形である。しかしながら、有声破裂音の直前以外の位置にある印欧祖語*s も散発的に共通スラヴ語*z に変化する可能性があることが知られている。本論文では、先行研究で問題とされてきた共通スラヴ語*-zg-という接辞が印欧祖語*-sk-に直接由来するわけではないことと、共通スラヴ語の接辞添加等による派生環境においては全ての有声音が直前の*s に有声性の同化を引き起こしていることを主張する。

1. はじめに

ギリシア語やサンスクリット語をはじめとする印欧諸語全ての共通祖先と措定される印欧祖語 (Proto-Indo-European、以下 PIE) では、*z は音素としては再建されず、*s の異音とされる。しかし、印欧祖語が様々な娘言語に分化した後に、多くの語派の内部で独自に音変化が起こり、新しく音素/zが生じている。ゲルマン語派で起こったアクセント文脈による有声化であるヴェルナーの法則 (Verner's law) などはその一例である。

ロシア語をはじめとするスラヴ語派の祖語である共通スラヴ語 (Late Common Slavonic、以下 LCS) ²も、そのような*s の有声化と音素化が起こった語派のうちのひとつであり、音素としての*z が再建されている。この共通スラヴ語*z の由来のうち、議論の余地なく明らかであるものは以下の二つである。³

(1) PIE *g^(h)の反映形 (所謂 satəm 化)。

例： PIE *ǵomb^ho- > LCS *zǫbъ 「歯」

(2) 有声破裂音の直前にある PIE *s の反映形。

例： PIE *mosg^ho- > LCS *mozgъ 「脳」

PIE *g^(h)r̥msd^(h)- > LCS *gręznōti 「沈む」⁴

¹ 本研究は JSPS 科研費 19J22945 の助成を受けたものである。

² 共通スラヴ語の再建形で用いられる文字のうち、*ь, *ъ はそれぞれ非常に短い u および i, *ę, *ǫ はそれぞれ *e, *o に対応する鼻母音、*c は無声歯 (茎) 破擦音を表す。*ǣ はおそらく前舌の広めの母音であり、ハーチェック付きの子音は口蓋化子音を表す。

³ PIE *-dd^(h)- > LCS *-zd- も理論上はあり得るが、確かな例が存在しない。可能性のある例としては LCS *gvęzda 「星」 などがあるが疑わしい (Derksen 2008: 195-196)。

⁴ この語では PIE *sdn > zdn > LCS *zn という変化で *d が脱落し、第二次分裂のような様相を呈している。この *d が脱落した形から逆成で *gręz- という語根が作られ、LCS *gręza 「泥」 のような新しい派生語が生じている。

PIE **mēms-d^hr-eh₂*-> LCS **męzdra* 「真皮」

しかしながら、上記の二つの条件に当てはまらない共通スラヴ語**z*の例が相当数存在している。例えば以下のようなものが挙げられる。

例： PIE **d^hrsu-*> LCS **dьrзь* 「大胆な」

PIE **moig^h-sk-eh₂*-> LCS **męzga* 「樹液」

PIE **pōs-h₃nog^{wh}-ut-i-*> LCS **paznogъь* 「蹄」

PIE **h₁eg^hs h₁nek-*> LCS **jbz-nesti* 「運び出す」

これらの例はどれも PIE で**s*が再建されている位置に LCS **z*が表れており、このこと自体は Nehring (1894: 399) が既に指摘している。しかし、PIE **s*は原則として LCS **s*あるいは**x*に変化することが知られているため⁵、PIE **s*が LCS で**z*という反映形をもつのは現状では動機を説明できない例外的な変化である。この変化をどのように説明するのかという問題は、スラヴ語歴史音韻論に他の未解決問題が多くあることもあってほとんど検討されておらず、現在に至るまで未解決のまま残されている。

2. 先行研究

2.1. Zupitza の仮説

Zupitza (1904: 396–398) は、直前の音節の頭子音が鼻音単独あるいは破裂音と流音の子音連続で、かつその音節に強勢がある場合に、PIE **s*>LCS **z*という音変化が起こったと主張した。

例： PIE **grōs-eh₂*-> LCS **groza* 「恐怖」(?) cf. Lith. *gras-ūs* 「ひどい」

PIE **mōsl-*> LCS **mozolъ* 「魚の目」(?)⁶ cf. OHG *masar* 「小さい点」

この仮説は Trubačev (1974-) のような語源辞典で参照されている例が稀にみられるのみで、歴史音韻論の分野でこれに言及している研究は Shevelov (1964: 147–149) などに限られる。この仮説の問題点は、Shevelov が述べているように、例として挙げられている語彙のほとんどが別の方法で説明可能であることである。例えば、LCS **groza* は PIE **grōs-*ではなく PIE **g^(wh)roǵ^(h)*のように再建することが可能である (Derksen 2008: 191)。また、この変化を支持する音韻的動機が不明であることも大きな問題である。

2.2. Scheftelowitz の仮説

Scheftelowitz (1927) は PIE **D^hsk* → **zg^h* (> LCS **zg*)という音変化が起こっていると主張した。

例： PIE **moig^h-sk-eh₂*- → **moizg^heh₂*> LCS **męzga* 「樹液」(?) cf. Lith. *mįž-ti* 「用を足す」

これは印欧祖語の内部で起こったと主張されているため、全ての印欧語に関して検証を要する問題であるが、概して受け入れられていない。なお、仮にスラヴ語派のみを対象としたとしても、既に挙げた PIE **b^hreh₁ǵ-sk-o-*> LCS **brěskъ* ~ **bręzъь* 「暁」のような語が反例となる。

⁵ PIE**s*>LCS **s*~**x*に言及している先行研究は無数にある。例えば Clackson (2007: 38)等を参照せよ。

⁶ PIE **ō*>LCS **a*であるため、PIE **s*とLCS **z*の関係如何にかかわらず、この語を PIE **mōsl-*と結びつけることは妥当でないが、ここでは Zupitza (1904: 398) の解釈をそのまま紹介した。実際のところ、この語の語源に関しては一致した意見がない (Trubačev 1974-: XX: 100)。

2.3. Liewehr の仮説

Liewehr (1956: 16–21) は、表現的 (expressive⁷) 意味を表す際に PIE *s が LCS *z に変化すると主張した。

例： PIE *b^hreh₁ǵ-sk-o- > *brěskъ > LCS *brěskъ ~ *brězǵъ 「暁 (?) cf. Skt. *bhrāj-a-te* 「輝く」

PIE *moig^h-sk-eh₂- > *měska > LCS *mězga 「樹液 (?) cf. Lith. *mỹž-ti* 「用を足す」

もしこの仮説が正しいならば、PIE *b^hreh₁ǵ-sk-o- は一旦規則的な音法則の通りに *brěskъ という形になってから、意味あるいは語用論的な要請によって *brězǵъ と有声化する。しかしながら、例えば樹液という語に表現的意味があるのかということは極めて疑わしい。また、音法則である可能性が検討されていないことも問題である。

2.4. Machek の仮説

Machek (1968: 400) は破裂音に限らず、共鳴音を含む有声音の直前で有声性の同化が起こると主張した。

例： PIE *nis > LCS *nizъ 「下に (?) cf. Skt. *nir-dahati* 「焼き尽くす」

これは Machek が LCS *nizъ 「下に」の語源について論じた箇所では提案されている変化である。この仮説は、PIE *nis- が他の娘言語と同様に動詞や名詞の接頭辞であったと仮定したものである。すなわち、Machek の主張では、まず *nis が有声音を持つ語に前接した時に *niz- という異形態が生じ (cf. Skt. *nis* → *nir* / _[+voice])、これが基底形として再解釈される。これが後に接頭辞から副詞となり、二次的に *-ъ が付加されたことになる。

しかしながら、PIE *snoig^{wh}-o- > LCS *sněǵъ 「雪」をはじめとする非常に多くの例が示すように、原則として共通スラヴ語における有声性の同化は有声 (口唇) 破裂音の直前でのみ起こる。それに加えて、Majer (2016: 269) が指摘したように、LCS *j₁z- から新たに作られた前置詞 OCS *izъ* など、二次的に付加された *-ъ は綴りの上で脱落しやすいという特徴があるが、LCS *nizъ に由来する OCS *nizъ* の *-ъ は脱落しない。したがって、LCS *nizъ の *-ъ は二次的に付加されたものではない可能性が高い。そのため、LCS *nizъ を PIE *nis と結びつけることは不可能だと思われる。

3. 仮説とデータ

3.1. 仮説

以上で述べたように、先行研究で提起された説はどれも決定的ではなく、疑問の余地がある。しかし、これらの研究で提示されている例や仮説から、PIE *s に由来する既知の音変化で説明することができない LCS *z について、以下の三つの特徴を見出すことができる。

⁷ Liewehr (1956: 11) による「表現的」の定義は「縛る(schnüren)、結ぶ(binden)、鎖に繋ぐ(fesseln)といった意味の領域のもの」であるが、これを表現的と呼べるのかは疑わしい。13 頁に「感情的色合いを伴った(mit emotional gefärbtem Vorstellungsgehalt)」という言い方をしている箇所もあり、この論文内でさえ定義が一貫しているようには見受けられない。したがって、この「表現的」とは不規則的な音変化が起こる語に共通してありそうな何らかの意味的連関という程度の意味合いだと思われる。

- (a) 先行研究で議論の中心となっている形態素は名詞や動詞を派生する接辞 LCS *-zg- である。そして、これはおそらく印欧祖語の継続相ないし反復相の接辞 *-sk- に由来する接辞 LCS *-sk- の異形態である。⁸
- (b) LCS *-zg- 以外の PIE *s > LCS *z の例は、複合語の形態素境界に現れることが多い。
- (c) 一つの形態素の内部における PIE *s > LCS *z の例は、PIE *d^hrs- > LCS *dbrz- 「敢えて～する」という語根に限られると思われる。PIE *-u- で派生した形容詞 LCS *dbrzъ 「大胆な」や、鼻音挿入による現在形に由来する LCS *dbrznōti 「敢えて～する」のような語がこの語根に属する。
- 以上のことから、本論文では以下のような仮説を提起する。

仮説 1：共通スラヴ語において動詞、名詞を派生させる接辞 LCS *-zg- (e.g. LCS *mězga 「樹液」) は、PIE *-sk- に直接由来するものではなく、別の起源をもつ接辞が LCS *-sk- (< PIE *-sk-) の異形態となったものである。

仮説 2：接辞添加や複合語境界といった派生環境において、全ての有声音が直前の *s を有声化する (e.g. LCS *paznogъty 「蹄」)。前述したように、PIE *g^(h) > LCS *z という変化の結果として既に共通スラヴ語に音素としての *z が存在しているため、これは新たな音素を生み出さない「第一次分裂」(primary split) であるといえる。

3.2. 共通スラヴ語の接辞 *-zg-

共通スラヴ語の *-zg- という接辞は Zupitza (1904) や Scheftelowitz (1927) といった先行研究で PIE *-s- > LCS *-z- が起こった形態素の代表的な例として扱われている。したがって、これについては本論文でも何らかの見解を示す必要がある。

本論文ではこの LCS *-zg- に含まれる *-z- が PIE *-s- に直接由来するものではないと主張する。上に挙げた仮説 1 が正しく、LCS *-zg- が PIE *-sk- と別の起源をもつ接辞であるならば、PIE *-sk- > LCS *-zg- という音法則を仮定する必要がなくなり、PIE *-s- > LCS *-z- が起こった候補となる形態素からこの LCS *-zg- という接辞が除外される。

このような仮説を提起する根拠は二つある。一つ目は、LCS *-sk- と *-zg- の両方をとりうる語根が存在することである。一見すると、音変化が起こったものと起こらないもので二重語 (doublet) を形成していると解釈することもできるように思われる。しかしながら、*-sk- と *-zg- の両方をとりうる語根の構造 (すなわち、頭子音が *br, *dr, *l のいずれかであるというもの) から、PIE *-sk- > LCS *-zg- という有声化が起こる音声的動機を見出すことはできない。すなわち、PIE *-sk- > LCS *-zg- を規則的な音変化と定義することは困難であり、むしろ特定の語根にのみついていた *-zg- が似たような構造をもつ語根へと類推によって拡大した可能性の方が高

⁸ ただし、LCS *-sk- という接辞は印欧祖語の継続相ないし反復相の接辞の名残にすぎず、共時的に一定の意味を担ってはいない。また、継続相ないし反復相の接辞が名詞派生に用いられるとは考え難いため、共時的に名詞に付加されているように見える例は、(おそらくスラヴ語派内部で継続相ないし反復相の意味が薄れた後に) 動詞語幹から名詞化されたものであると思われる。即ち、PIE *meig^a- からまず LCS *mězgati 「樹液をとる」が先に派生し、この動詞から LCS *mězga 「樹液」が派生したと考えられる。

い⁹。二つ目は、LCS *-sk-が付与された場合と LCS *-zg-が付与された場合との間に意味的な差異が生じないことである。これは LCS *-sk-と*-zg-が一つの形態素の異形態であることを示唆している。両形態の分布は以下のとおりである。

(a-1) 頭子音が*mの語根は*-zg-をとる。ただし例が以下に挙げた一語根のみであるため、偶然の可能性を排除できない。

例： PIE *meiǵ^h- > LCS *mězga 「樹液」
 PIE *meiǵ^h- > LCS *mězgati 「樹液をとる」

(a-2) 頭子音が*br, *dr, *lの語根は*-zg-と*-sk-の両方を取りうる。¹⁰

例： PIE *b^hreh₁ǵ- > LCS *brěskъ ~ *brězǵъ 「暁」
 PIE *d^hrejǵ- > LCS *driskati 「腹を下す」
 PIE *d^(h)rog^(h)- (?) > LCS *drozgati 「こねる」
 PIE *loyp- > LCS *luska ~ *luzga 「皮、殻」

(a-3) 上に挙げた以外の語根は*-sk-をとる。

例： PIE *b^hlejǵ- > LCS *bliskъ 「輝き」
 PIE *h₂is- > LCS *j₁skati 「探す」
 PIE *prus- > *pr₁skati 「飛び散らす」
 PIE *te₁H(?) > *tiskati 「しぼる」

ただし、この LCS *-zg-が一体何に由来しているのかという点は判然としない。LCS *-zg-が PIE *-s-g^(h) > LCS *-zg-というライムをもつ何らかの語根が PIE *-sk- > LCS *-sk-が付加された動詞と似た意味を担っており、そこから*-zg-が接辞として取り出される逆成によって生じた接辞であると考えられることもできる。しかし、スラヴ語派で例証されている語のうち、この逆成の起こりうる語は PIE *moys-g- > LCS *muzga 「ぬかるみ」、PIE *mus-g- > *mъzga 「灰色、曇天」の二語しか存在しない。これらの語から動詞接辞が生じるとは考え難い。

あるいは、PIE *-s-というライムをもつ語根を PIE *-ǵ- (> LCS *-z-, *sの直後で PIE *-s-ǵ- > LCS *-zg-) で拡張したものであると考えることも可能である¹¹。このような接尾辞的に付与される PIE *-ǵ- > LCS *-z-は一定の生産性をもつが、PIE *-s-をライムに持つ語根に付与されている確かな例が存在しない¹²。結局のところ、この問題については、LCS *-zg-の由来は PIE *-sk-ではないか、方言借用などその規則的反映形ではない別の何かである、と述べるにとどめざるを得ない。

⁹ また、ヴェルナーの法則の場合とは異なり、強勢位置の変化が二重語を生み出している可能性は低い。もし強勢位置の変化で二重語が生じるのなら、二重語が生じる語根の構造に(a-2)のような制約はかかりえない。方言間借用の場合も同様である。

¹⁰ なお、頭子音が*grの例もここに属する可能性があるが、*-sk-をとるものも*-zg-をとるものも実例を見つけないことができないため不明である。

¹¹ 語根の拡張の例としては、PIE *(s)teu- 「叩く」が各語派で様々な子音で拡張されている例が代表的である。スラヴ語派では*(s)teu-k- > LCS *stukati と*-k-で拡張される。ただし Rix et al. (2001: 600–602)はそれぞれを別々の語根として記述している。

¹² Trubačev (1974-: VII: 160–161) が正しいならば、PIE *gru(H)- > LCS *gry-z-ti 「齧る」などがこの PIE *-ǵ- > LCS *-z-による拡張の一例である。また、共通スラヴ語には*-zъのような接辞も存在する (Il'inskij 1912)。

3.3. 複合語の形態素境界における有声化

複合語の形態素境界に現れる PIE *-s- > LCS *-z-の例を説明するのが仮説2である。これは2.4で述べた Machek (1968) の仮説と類似しているが、無条件で有声化が起こったと主張することは前述の通り不可能である。しかし、派生環境に限定することで、PIE *snoig^{wh}o- > LCS *snęgь 「雪」のような例に矛盾することなく、母音・共鳴音を含む全ての有声音の直前で有声性の同化が起こったと説明することが可能となる。

実際のところ、動詞接頭辞 LCS *jьs- 「～から」を付与した動詞と、複合語の LCS *paznogьь 「蹄」以外に仮説2を支持する確かな例は存在しない。これはそもそも共通スラヴ語で*sと共鳴音が複合語の形態素境界で隣接すること自体がほとんどないためである¹³。s語幹名詞であっても、複合語の前部要素になる際には語幹の*-os-ではなく単数主格形の*-o-が用いられる (e.g. LCS *kolo-vozь 「轍 (lit. 車輪運び)」。したがって必然的に例の数は限られたものになる。また、LCS *jьs- 「～から」も LCS *paznogьь 「蹄」もこれ以外の方法で説明することが困難であるという点も、非常に消極的ながらこの仮説を支持する要素となる。¹⁴

(i) 前部要素が語根の場合

例: PIE *pōs h₃nog^{wh}-ut-i- > *pas-nogьь > LCS *paznogьь 「蹄」¹⁵

(ii) 前部要素が接頭辞の場合

例: PIE *eg^hs h₁nek'- > *is-nes- → *iz-nes- > LCS *jьznesti 「運び出す」

PIE *eg^hs h₁m̥- > *is-im- → *iz-im- > LCS *jьzęti 「引き出す」

cf. PIE *eg^hs ph₃i- > *is-pī- > LCS *jьspiti 「飲み干す」

この PIE *eg^hs > LCS *jьs- という接頭辞は、ロシア語 *iz(o)-* 「～から」をはじめ、スラヴ語派の各娘言語で基底が /iz/ に変化している。しかしながら、語源を考慮すると本来の末尾の音は *-s である。PIE *eg^hs > LCS *jьs- と変化した後、この有声化によって LCS *jьz- という異形態が生まれ、これが娘言語で基底形として再解釈されたと考えるのが妥当である。

¹³ *s 以外の子音に至っては皆無である。

¹⁴ また、共通スラヴ語の娘言語のほぼ全てにおいて、イェルの脱落后に生じた子音連続が有声性について逆行同化を起こすことが知られている (Collins 2018: 1492)。イェルの脱落は歴史時代以降の変化であるため、この同化がそれぞれの娘言語で独自に存在することは、共通スラヴ語の内部に有声性の同化が生産的な音韻規則として存在していたことを支持する根拠になる可能性がある。ただし、バルト語派にも同様の同化がみられるため、有声性の同化が地域特徴であった可能性も否定できない。

¹⁵ *h₃ はスラヴ語派の分化よりも以前に脱落するため、この複合語がスラヴ語派の内部で新しく作られた時点では、*s と *n の間に形態素の境界がある。なお、Pedersen (1909: 292) は LCS *paz-nogьь の *-z- が同じ前部要素を含む複合語の LCS *paz-duxa 「懷」からの類推で生じたものであると主張しているが、LCS *paznogьь と LCS *jьz- に起こった有声化を一つの規則でまとめて説明できる点で本論文の仮説のほうがよいと思われる。なお、Pedersen (1909: 292) は LCS *paz-nogьь の *-z- が同じ前部要素を含む複合語の LCS *paz-duxa 「懷」からの類推で生じたものであると主張しているが、LCS *paznogьь と LCS *jьz- に起こった有声化を一つの規則でまとめて説明できる点で本論文の仮説のほうがよいと思われる。

4. 結論

以上の議論から、PIE *s に由来する LCS *z について以下の二つの結論を導き出すことができる。

- (a) 共通スラヴ語において動詞、名詞を派生させる接辞 LCS *-zg- は、PIE *-sk̑- に直接由来するものではなく、別の起源をもつ接辞が LCS *-sk- (< PIE *-sk̑-) の異形態となったものである可能性が高い。この LCS *-zg- という接辞は PIE *-s-g^(h) あるいは PIE *-s-ǵ という末子音をもつ別の語根からの逆成で生じたものである可能性がある。
- (b) 一般的に非派生環境では有声破裂音 (LCS *b, *d, *g) のみが有声性の同化を引き起こす。しかしながら、派生環境においては摩擦音・共鳴音を含む全ての有声音が有声性の同化を起こすようになり、例えば LCS *s と LCS *n が形態素境界で隣接した場合に *sn > *zn と変化する。これによって有声化したのが LCS *jъz-nesti 「運び出す」や LCS *paz-nogъtъ 「蹄」である。

ただし、LCS *dъrъzь 「大胆な」や、LCS *dъrзати/*dъrзnōti 「敢えて～する」のような語が属する語根 *dъrз- (< PIE *d^hr̥s-) の末尾の *-z は本論文の仮説では説明することができない。同様の環境で PIE *s > LCS *z が起こらないことは LCS *čerslo 「鋤」のような例からうかがい知ることができるため、LCS *dъrз- の *-z を規則的な音変化の結果として説明することは難しい。この *dъrз- という語根をいかに説明するかということが今後の課題となる。

この語根に関しては、所謂 RUKI の法則によって PIE *rs > LCS *rx となるはずの環境でこの変化が起こらない、ということが注目に値する。考えられる可能性としては、RUKI の法則が起こらない環境があるという可能性や、PIE *d^hr̥s- が一旦 *d^hr̥s-ǵ- > *dъrзg- と拡張されたのちに、*dъrзg-nōti > LCS *dъrзnōti として *-g が脱落し、これが LCS *dъrз- という語根から作られていると再解釈された可能性などが挙げられるが、どちらも証拠が存在しない。ただし、明らかに冗長な説明である後者の可能性よりは、前者の可能性の方が検討する価値があると思われる。

RUKI の法則は、その条件の複雑さから複数の語派で偶然に独立して起こったとは考え難い音法則であるが、破裂音の直前で変化が阻害されるかといった細かい点がインド・イラン、バルト、スラヴの各語派で少しずつ異なっている。RUKI の法則はいつ起こったのか、複数の語派の間の共通革新であるのかといった点を改めて検討することで、印欧語族の各語派の分岐の仕方や、説明できないまま残ってしまった LCS *dъrъzь の説明方法も明らかになる可能性がある。

略号一覧

D: any voiced obstruent / LCS: Late Common Slavonic / Lith.: Lithuanian / OCS: Old Church Slavonic / OHG: Old High German / PIE: Proto-Indo-European / Skt.: Sanskrit

参考文献

- Clackson, James (2007) *Indo-European Linguistics. An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Collins, Daniel (2018) The phonology of Slavic. In: Klein, Jared at al. (eds.) *Handbook of comparative and historical Indo-European linguistics*. Vol. 3, 1414–1538.
- Derksen, Rick (2008) *Etymological dictionary of the Slavic inherited lexicon*. Leiden: Brill.
- Ильинский, (1912) Suffiks oz/ez/ъz v slavjanskix jazykax. *Izvestija Otdelenija russkogo jazyka i slovesnosti Imperatorskoj Akademii nauk* 16(4): 11–12.
- Liewehr, Ferdinand (1956) Über expressive Sprachmittel im Slawischen. *Zeitschrift für Slawistik* 1: 11–27.
- Machek, Václav (1968) *Etymologický slovník jazyka českého*. Praha: Nakladatelství Československé akademie věd
- Majer, Marek (2016) The etymology of Slavic *nizъ ‘down(wards)’ and some similar forms in other branches. In: Bjarne Simmelkjær Sandgaard Hansen, Benedicte Nielsen Whitehead, Thomas Olander and Birgit Anette Olsen (eds.) *Etymology and the European Lexicon. Proceedings of the 14th Fachtagung der Indogermanischen Gesellschaft, 17–22 September 2012, Copenhagen*, 267–280.
- Nehring, W. (1894) Bemerkungen zu den z-Lauten im Slavischen, vornehmlich im Altslovenischen. *Indogermanische Forschungen* 4: 397.
- Pedersen, Holger (1909) Zum slav. z. *Indogermanische Forschungen* 26: 292–294.
- Rix, Helmut (2001) *Lexikon der indogermanischen Verben*. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert.
- Scheftelowitz, J. (1927) Idg. zgh in den Einzelsprachen. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete der Indogermanischen Sprachen* 54: 224–253.
- Shevelov, George (1964) *A prehistory of Slavic*. Heidelberg: C. Winter.
- Trubačev, Oleg Nikolaevič (ed.) (1974–). *Etimologičeskij slovar' slavjanskix jazykov. Praslavjanskij leksičeskij fond*. Moscow: Nauka.
- Zupitza, E. (1904) Miscellen. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete der Indogermanischen Sprachen* 37(3): 387–406.

On Late Common Slavonic *z Deriving from Proto-Indo-European *s

Yūsuke ŌYAMA
xzel83ph@gmail.com

Keywords: Historical linguistics, Proto-Indo-European, Late Common Slavonic, phonology, assimilation

Abstract

Late Common Slavic *z usually derives from Proto-Indo-European *ǵ^(h) or Proto-Indo-European *s immediately before a voiced stop. However, Proto-Indo-European *s may also yield Late Common Slavonic *z in positions other than immediately before a voiced stop. In this paper, we suggest that the Late Common Slavonic suffix *-zg-, which has been thought to be an instance of *s > *z in previous studies, does not directly derive from the Proto-Indo-European *-sk-, and that any voiced sound including sonorants cause the voicing of *s in derived environments in Late Common Slavonic.

(おおやま・ゆうすけ 東京大学人文社会系研究科博士課程)